

(仮称) まつど市民大学設立準備懇談会 (第2回) の概要

- 《日 時》 平成28年8月23日(火) 10時～12時
《場 所》 松戸市役所新館5階 市民サロン
《委 員》 神山 眞理 委員、密岡 晃委員、阿部 剛委員、大塚 清一委員、小川 早苗委員、佐久間 浩子委員、関谷 昇委員、牧野 昌子委員、萩島 賢治委員、林 総太郎委員
《傍聴者》 0名

議題

1 第1回(仮称)まつど市民大学設立準備懇談会の議事録について

委員が、第1回(仮称)まつど市民大学設立準備懇談会の議事録を確認した。

2 (仮称)まつど市民大学骨子(案)について

(座長)

町会・自治会等のように地域に根ざした活動に加え、NPOや市民活動団体も、近年注目され、実際に松戸市でもかなりの数が存在し、活動している。

それぞれの活動の担い手を増やしていくと同時に、様々な立場の方が、交流し、横に繋がって課題解決に取り組んでいく。これからの時代、特定の団体だけで、自己完結していくことは、物理的に難しくなっていくであろう。異なる立場、経歴の人が融合することによって、様々な考え方、手法が持ち寄られ、相互に補完しあう。そういったことをしていけるような人材を作っていくことも必要であり、それが市民大学の一つの特徴になっていく。

また、市民大学の目的は、一義的には担い手の育成であり、まず、色々な人材が育っていく裾野を拓くことである。しかし、裾野を拓くための学びの場は、すでに松戸市内には存在するので、そことの差異化を図っていかなければならない。

(委員)

活動への参加先は、町会・自治会と広い意味のNPOであるということだが、一般の市民がこの表現を正しく理解をできるとは思えない。

実際に本市で活動している社会福祉協議会、地区社会福祉協議会のほか、公的ボランティアと呼ばれる民生委員・児童委員、保護司、人権擁護員等においても、担い手不足の話聞くので、そのような機関等にも参加してもらいたいのであれば、具体的に丁寧に書き込んでいくべきである。その方が、こちらが欲している人材を理解してもらえ、目的を掘り下げることにもつながる。

(委員)

先日の第1回(仮称)まつど市民大学プレオープン講座に参加したところ、グループ

ワークの中で、他の参加者から、ボランティアについて興味はあったが、なかなか参加したことがなかったので、「ボランティアデビューのきっかけつかみませんか」というタイトルに惹かれて参加したとの発言があった。

実際にボランティアについて、一般の市民の方は、知らないことが多いので、まず、市内にはいろいろな活動をしているところがあると知ったうえで、自分が何をできるのかを考えられるように持っていけるカリキュラムにしてほしい。

(座長)

カリキュラムにも関わってくるところであるが、市民意識アンケート調査によると、市民活動についてある程度の関心はあるが、その関心を具体的な行動に結び付けていない点で、垣根がある。

また、具体的な実情がわからないので、どのような活動をしているか分からないが、それが分かれば、自分も関わってみたいと思う潜在層がいる。そのような潜在層を、市民大学でどのように引き上げていくか、巻き込んでいくかが、非常に大きなポイントになってくる。

講義の中で、実際の活動をしている方から話を聞き、講義を通して知ってもらうだけでも、大分変わってくるので、そのようなカリキュラムの組み立て方も必要である。

(委員)

私は、町会・自治会、社会福祉協議会、地区社会福祉協議会、地域の任意団体など、いろいろな団体と関わりを持っているが、そこでもやはり、人材不足が課題になっている。特に、企画力があって、フットワークの良い人材が最も欠けている。そのような人材がほしいし、退職者に地域に入ってきて担ってほしいのだが、なかなか出てこない。企画力があれば、いろいろな展開ができ、全体的な活動が発展していく。

また、ある程度知識がある人と、全く知識のない人が一緒にやるのは難しいので、分けたかたちでやるのが望ましい。一緒にやろうと思っても、理解の進み具合に差があるので、行ってもつまらないと思われてしまう。

(委員)

入口のところで、市民のボランティアとして既に様々な活動をしている団体、民生委員・児童委員、保護司、地区社会福祉協議会などの仕組みや機能を分かっていない人も多い。一方、コーディネーターとして、それらのいろいろな機能を繋げていき、新しい課題解決型を提案していく人も必要であることを考えると、やはり入口は二通りあると思う。

また、目的の項目では、人材を育成する旨の記載があるが、もう1つ大きな目的として、松戸の地域を良くする、地域の課題を解決するということがある。そのうえで、この市民大学が、それを担う人材を育成するということを加えていただきたい。

(座長)

今までの議論では、目的は、地域のことを全く知らない方も含めて、裾野を拓いて、

少しでも担い手を育成するところに重きがあった。

しかし、担い手をどのように育成していくのかについては、何も分からないけれども、いろいろなことを知りたい、学びたい方に裾野を拓く入口と、ある程度いろいろな活動に精通しているものの、まだ率先して企画をするには至っていないため、市民大学の授業を受けていくことによって、先進事例を学んだり、具体的にそれぞれの地域の実情に沿ったかたちで企画を立てられる発展型のような入口が2つあった方が良いという意見が出ている。

(委員)

2段構えには賛成する。私も第1回(仮称)まつど市民大学プレオープン講座に参加したが、そのときに、こういう会は初めてであるという人と同じグループになった。その人は、健康であるし、何も悩みもないけれど、たまたまこのようなチラシを見て、興味をもって参加したと言っていた。このような場があることを知らない、初めてのの人に知らせる仕掛けが必要であり、せっかく意志があるのに知らされていないのが問題である。

地区社会福祉協議会で広報紙を作る手伝いをしているが、民生委員・児童委員、地域包括支援センターという言葉自体がよく分からない人もいるので、「民生委員・児童委員って何?」というコラムをつくって、図表を使って示したこともある。今まで活動に関わったことがない方でも今後担い手になると思うが、普通に暮らしている方たちは、そのような言葉の意味があまりよく分からないというのが、実情である。

(委員)

本市の既存の生涯学習は歴史があって裾野も広く、松戸市の生涯大学だけでも多くの方が活躍されている。その中で、生涯学習を通じた地域のひとつづくりであり、単なる生きがいつくりではないと言われて久しい。テーマとしても、生涯学習の分野でひとつづくりに取り組んでいるのに、それと同じことをやるのであれば、税金の二重投資にもなりかねない。生涯学習との棲み分けが必要である。

既存のものをもう一度PRし、連携を図りながら、生涯学習で学んだ方が、市民大学に参加するというのもひとつの流れである。例えば、生涯学習として、地区社会福祉協議会や民生委員・児童委員を紹介するような講座があっても良い。まず、生涯学習の分野で地域の一般教養的な講座を開催し、修了した方たちが、次のステップとして、市民大学に参加してもらえれば、生涯学習の立場からしても、有益である。

(座長)

他の自治体を見ていると、様々な学びの場はあるが、市民大学との違いが明確になっていないところがある。参加者から、実践的なことよりも、むしろもっとゆっくり学びたい、市民大学において実際に講座で提供されるものが想像していたものと違うという批判もある。違いが明確にできるのであれば、非常に望ましい。

(委員)

市民大学は、1年限りのものではないので、2年後、3年後その次を見据えて、いわゆる初歩的な方や、中間にいる方が次の担い手になるので、そのような人たちのことを考えて、どういう設計をしていけばよいのかを検討しなければならない。

NPO、社会福祉協議会、町会・自治会のいずれも、みんなに知ってもらうため、PRに努めていることから、それらと連携して、カリキュラムの中で大いに取り上げてほしい。

また、卒業後は、必ずしも団体に所属して活動しなければならないということを強要しなくてもよいと思う。

(委員)

今われわれが直面している関心度の高いテーマを3つくらい取り上げてやった方がより参加者が出て来ると思われる。あまり広くやると、ポイントがつかめなくて、参加が難しい。

(委員)

情報発信に関し、「見える化」していないことが問題である。生涯学習推進課、町会・自治会、社会福祉協議会はそれぞれ活動し、情報発信をしているが、現状は、しっかり「見える化」していないため、実際には知られていない。

何か活動しようと思ったときに、次の一步を踏み出せる軽いステップの1つとして市民大学があるように思える。まず「見える化」したうえで、ここで何をするかという話になってくる。

(座長)

今までの議論を整理すると、地域の課題解決を担う人材を育てていくこと、生涯学習とは、棲み分け切り分けて、実践志向のことを学んでいくことを大きな柱にする。そのうえで、その実践志向はあるが、まだまだ地域のことをよく分からない方に裾野を拓いていこうとする入口と、いろいろな経験やスキルを持った方が、そのスキルを磨いていく、より発展させる入口の2つに分け設定した方がよい。

カリキュラムについて意見が出ているが、町会・自治会とは何か、NPOとは何か、という初歩中の初歩を生涯学習の学びの場で設けることは可能であり、それを踏まえたうえで、市民大学では、より実践的なこと、町会・自治会が実際にどのような活動を行っている、どんな課題を抱えているのかを知る場がまず必要である。

それから、様々な課題がある中で、場合によってはテーマを絞りながら、市民活動や地域活動の総論的なものではなく、具体的な松戸の問題、その問題に対する市民または市の対応を、市民大学では本格的に学び、より踏み込んだ内容にする。なお、年度によっては社会情勢に合わせてテーマを変えれば、より実践志向の人材を育成することになる。

(委員)

本市は、他市と比べても決して劣ることがない活動をしていると思う。しかし、団塊

の世代のように初めて地域デビューする人たちにとっては、今まで、全く関心がない部分であり、情報は溢れているが、それを見たことも無いし、どのように入手するのも分かっていなかったのだろう。

ただ、いろんなメニューの中で、まつど市民活動サポートセンターでは、見本市や各種の講座をやっているし、生涯学習の分野でもやっている。ここで、(仮称)まつど市民大学の設立は、そのようなものを改めて体系化して、市民に示す良い機会である。

(座長)

市民大学の流れ(ストーリー)、カリキュラムの基本的な考え方にまで議論が及んでいる。

カリキュラムの基本的な考え方のところでは、まず、(1)市民の活動を知る講義として、さまざまな活動の実情を知る。

次に(2)市の課題を考えるワークショップでは、市としてどのような事業を実施しているかを市民が学ぶ場があって良い。例えば、防災の分野では、危機管理を含めた体制を市として整えつつあるが、地域としてはどうすべきかを、市から情報提供したうえで、ワークショップを重ねれば、自分たちのできることを学び、考え、よりレベルの高い参加者であれば、新たな企画を練るような人材に育っていくことにもつながる。市の課題を考えるには、市としてどのようなことを行っているかをある程度学んだ方が良い。

また、カリキュラムといっても、市民大学だけのカリキュラムではなく、市民活動やボランティアに関する松戸市内全体の各種のカリキュラムを踏まえて、それを体系化しながら、市民大学の実践志向のカリキュラムを作っていくことが前提になってくる。

(委員)

市の課題について、行政である市が、それぞれの分野で持っている課題を受講生に示すことは、課題解決という手段を考えるときに良いと思う。市原市の市民大学では、各部署の持っている課題を、市職員が受講生に話し、そこから関心のある分野毎に分かれて、1年間実践を踏まえながら勉強し、卒業の頃には、何人かのグループが出来ている、というやり方を取っている。

市として、市民大学を開設していくのであれば、市の持っている課題を示していく中で、実践型でやってほしい。

(委員)

カリキュラムに関係することであるが、第1回プレオープン講座のテーマが、「ボランティアデビューのきっかけつかみませんか」ということで、非常に分かりやすい名前になっている。「認知症を学ぶ」という講座は人があまり来なかったが、「妻の名前を忘れた日～認知症を・・・」というテーマにしたら、とても人気があった。名前はとても大事である。目的の項目の中で、町会・自治会や地域ボランティアのデビューなどの中で、「ボランティア」という言葉がひとつのキーワードである。名前にボランティアが入っ

てきてよいと思う。目的がボランティアであるので、そういったことをダイレクトに出したネーミングの中で示してほしい。

また、高齢化や防災もあるが、最大の市の課題は少子化であり、子どものために高齢者が何をできるのか、役所が、企業が何をできるのかを考えるべきである。

カリキュラムの中に少子化対策を、松戸市として抱えている問題として強く打ち出しでもよいと思う。

(委員)

生涯学習でもいろいろと実践的なことも含めて講座を開催しているが、学びたい人のためのものであって、その先の受け皿が用意されている訳ではない。

ところが、市民大学では、地域と連携しながら具体的に人を育てて、地域で学んだことを還元してもらおうという具体的なものであるので、カリキュラムについて、こういう人材を必要としている、こういった人材を市民大学で輩出してもらいたいという提案を反映させれば、輩出した人材が地域で受け入れられ、活躍が期待できる。

オーダーを受けてその年のテーマを決めていくので、テーマによっては、年度ごとにカリキュラムは変わってもよい。

(委員)

地域という言葉の定義が幅広く、町会・自治会、社会福祉協議会、地区社協、民生委員・児童委員も含まれ、また各地域によっても特色がある。

ある町会長が、人材が不足していて、特に新しい人が入ってこず、担い手がいないと困っていたので、若い人を対象にした飲み会をやろう提案したが、町会長にその提案を一蹴されてしまったと、聞いたことがある。

人材不足が言われているが、提案してもなかなか相手にされないのが現状であり、やはりその接点をつくることが重要である。

(委員)

カリキュラムをつくって、コーディネーターを育成しても、その受け皿がどのように育っているか、ということが重要である。受け皿も育てていく方法が必要である。

(委員)

本市に住んでいる人の中には、潜在的に優秀な方が多いと思う。そのような人たちは、市の職員がやってくれない、市は何でこんな風にしらないのか、と思っているだけで、自分たちでやれることはやっていこうという意識が、まだ十分に育っていない。市民大学が、そのような意識を変えていけるような場になってもらいたい。

(委員)

意識を変えていくのは、実践ではなく、どうしたら松戸がもっと良くなるのか、という根本的なところが分かっていることが重要である。

(座長)

実践志向で、具体的な課題解決に向けて、自分に何ができるかを受講者がイメージし、

知識を身に付けスキルを学び、レベルの違いはあったとしても、活動につなげていけるような場を市民大学とする。

配布された資料によると、ほとんどの市民大学は分野別のカリキュラムを立てているが、分野別のカリキュラムだと、今の話と直結してこない。

今の案では、分野別というよりも主体別である。町会・自治会という切り口から入って、町会・自治会の活動内容、課題、必要とする人材などについて、現場で活動している人から話をし、提案してもらって、自分だったらこういうことができるなという気づきや学びを市民大学でつくっていく。同様に、社会福祉協議会であれば、現在の取組み、課題、必要とする人材などを、社会福祉協議会からも提案してもらうことになる。

提案型のカリキュラムづくりというイメージの通り、実践志向で、実際の現場の活動を念頭に置いて、そこでどのような人が必要とされているのかをカリキュラムに反映させ、受講者は、学ぶと同時にその流れの中で自分は町会・自治会に向いているということであれば、そこへつなげていく。あるいは、NPOに所属することも良いし、もちろん、団体に所属せずに、個人で活動していきたいのであれば、それでもよい。いずれにしても、学んだ後どうするか、先ほどから受け皿の話も出てきているが、その点を考えると、分野別ではなく活動主体別ということになる。活動主体別の市民大学は少ないので、まつど市民大学の特徴になり得る。

(委員)

新しい試みであり、また、対象者が地域の方や一般市民であることから、やってみないと正直わからない。地域の活動している方たちの声を聞きながら、活動実績を検証し、仮に上手くいかないようであれば、分野別にするなど柔軟な考え方が必要である。

(委員)

市民大学を卒業して、自分の住んでいる町会・自治会で活動したいという人がいたとしても、町会側が受け入れられないこともあり得るだろう。現在、松戸市では町会・自治会が15地区に分かれており、こういうテーマについてはこういう人材がいるということ、地区を介して話し掛ければ、受け入れたいと手を挙げる町会・自治会は出て来ると思う。そのような働きかけは、これから必要になってくるし、出来ると思う。

(座長)

カリキュラムの(4)を念頭に置いたときに、その辺の受け皿をどう柔軟に作っていかけるかが、それは市民大学だけの話ではなくなってくる。受け皿が充実すればするほど、市民大学の稼働率も上がっていくことになる、という期待もある。

(委員)

地域の町会・自治会は、地域のボランティアの一番身近な団体である。その中心的な役割を担う人を育てようとするのであれば、町会・自治会長から推薦を受けて、入学することも考えられる。そのような人が、町会・自治会に戻ってきて学んだ知識を活かして活躍すれば、周りの他の町会・自治会も、誰かを市民大学で勉強させようかという流

れになり、次につながっていく。

(委員)

第1回プレオープン講座で、多くの参加者が、地域の居場所づくりにとても関心があり、そのニーズの高さが窺える。既存の町会・自治会でも、行く場所、地域の中で集える場所としての居場所づくりはあり得るところであるが、自分たちで始め、もっと小さい規模の自分たちの居場所を作るなど、多様性を確保することも重要である。

(座長)

カリキュラムと対象者の部分に関し、議論いただいている。

募集方法に関して、地域の現場でどういった人材を必要としているのかを幅広く募り、さらに、具体的に活動主体から推薦してもらい、送り込んでもらうということもひとつである。

行政との連携の点では、行政も各部署単位で、こういった人材を必要としている、ということ提案してもらって、そのような場も作れば、地域自治、協働の人材を育成することにも結びつく。

形式的な対象者は広げ、事務局としては定年以降の方々を想定しているが、それぞれの地域の活動主体や行政から、こういった人材を必要としていて、育てたいという考えを強く打ち出していけば、募集対象や募集方法もより実質化してくる。

(委員)

募集方法が重要である。仮にレポートを提出してもらい、選考するのであれば、募集対象者に関し、「〇〇の方」や「〇〇の意識のある方」に加え、卒業後のゴールとして、こういった活動をするということを打ち出すことが大事である。例えば、里山ボランティア養成講座に関しては、みどりと花の課で実施しているが、すでに卒業した方に、活動の場が用意されており、それを目指してくる人たちが多し。卒業後にどのような活動をするのか、自分がどう動いていくのかを打ち出すことによって、応募する人の意識も変わってくる。

(委員)

一般で応募されてきた方で、当初は町会・自治会で活動したいと考えていた人が、受講している中で、NPOへの関心が高まり、自分はその方が向いているなど気づいたときに、学校の転入のように、コース等の変更を可能にしておいたほうが良い。

(座長)

その辺りもカリキュラムを考えるうえでは重要である。ある程度、活動主体別にカリキュラムを組み立てるとして、受講者はどう受けていくかである。町会・自治会関係の講座だけ受けるのであれば、視野が狭くなってしまふ。当初、事務局が想定していたのは、受講者は全部同じ講座を受けていくというイメージであるが、最初の3回は町会・自治会関係、その次はNPO関係、次は社会福祉協議会関係、といったように、全てを受けていくというカリキュラム構成が良いのか。それとも、コースを作った方が良いのか。

か。ただし、コース制の場合、受講者がそのコースの枠組みに捉われてしまうという悩ましさがある。

(委員)

募集する際には、説明会等を開催して、目的やコースの説明をしたうえで、丁寧に周知すべきである。そのうえでのコース分けであれば良いと思うが、いずれにしても学校でいうところの、全員が履修する必修部分と、専門の部分のカリキュラム構成があってもよい。

(委員)

入口のところでの受講者の視点をどこに持っているかが大事である。1年間だけで、視点を持たずに入ってきた方が、1年後がらりと意識が変わるとは思えない。最初の視点があっての成果だと思う。

また、コースを分けたとしても全体像を知っておく必要がある。成果の話にも絡んでくるが、例えば、30人から40人までの受講生の人数が成果ではなくて、その人が地域に出て行ったときに、地域でどれだけの周りの人を巻き込んでいけるかが、成果であり、地域で関わる人を増やすことがゴールだとしたら、そういう人を引っ張って行って、繋ぐことが重要である。そのような考え方に立てば、町会・自治会、NPO、社会福祉協議会等とはこういうものであると言えるような人材像が大事である。何か1つだけを特化して学ぶというよりは全体像を知っておくことが重要である。

(座長)

特定分野しか知らないと、人と人を繋ぐこともできず、その見方だけしかできないのであれば、別な壁をつくりかねない。ある程度の全体像、地域の横のつながりをつくるということはどういうことか、という点も含め、多様な形態、方法あるいは意義を学ぶ必要がある。カリキュラムの(1)市内の活動を知る講義では、受講生は、市内の多種多様な活動があることを学び、まず全体像を知るという意味においては、「見える化」を図っていくことは大事である。

カリキュラム(2)市の課題を考えるワークショップは、同一線上にあるかもしれないが、市としての施策を学ぶ場を柱にしてもよい。市民は、市がどのような取組みをしているのかを聞きたいというニーズがとても高い。市の施策を知ることにより、私たちがこれを行う必要がある、といったように協働の芽生えにもつながる。(2)では、市の施策の情報提供を盛り込んでほしい。

(1)と(2)が全体像を知るという意味合いになり、(3)活動に参加して体験するインターンシップでは、個々のニーズに応じたところであって、全体像を学んだうえで、NPOの活動を体験してみたい、町会・自治会で経験を積んでみたいなど、様々なニーズが出てくるので、実地体験は、個別に分かれて良い。

(4)の卒業後に向けてのフォローでは、ひととおり全体像を学び、実地体験をしたうえで、こういうところに入っていきたいのであれば、橋渡しを行う。市民大学として、

橋渡しまでできれば、これは相当大的な意味がある。

全体像を踏まえる部分、自分の関心をより踏み込んで体験していく部分、それから活動先につないでいく部分、その辺り揃っていると、全体的にバランスが取れた人材育成の仕組みになる。

(委員)

卒業後のフォローのところで、例えば1年後の同窓会を開催するなどして、現在の活動の継続状況、活動をしていない場合はその理由、こういうことを教えてほしかったという要望などの意見を聞いて、カリキュラムに反映させていった方がよい。同窓会は、参加者にとっても、改めてやる気を奮い起こす良い機会でもある。

(委員)

スポーツ以外の分野においても、認知症サポーターや子育て支援ボランティア等の養成講座はすでにあり、各課でも実施している。市民大学を卒業して次の年に、それらの講座の受講を勧めるというつなぎ方もある。既存の資源を生かすことは大事にするべきである。

(委員)

すでに活動を実践してきて気づいたところであるが、やはり行政、つまり市のバックアップは必要である。市民活動は、市民が自主的に活動するものではあるが、市の〇〇課が担当であるというように行政の名前があると、経験上、参加者の安心感が違ってくる。また、松戸市は、まさに、素晴らしい人材の宝庫である。そのような方も、定年退職して、居場所がなくて、地域の人と何かをやりたい人と思っている。

(座長)

前回の議論を踏まえたうえで、いくつかの特徴となり得る点を共有できたと思う。改めて、事務局は検討してほしい。

骨子案の5ページの募集まで検討したことになるので、交通整理したものを改めて共有するかたちにしたい。引き続き、議論をお願いしたい。

3 その他

第3回(仮称)まつど市民大学設立準備懇談会を平成28年10月25日10時から開催することとなった。